



「ヒストリー・ワールド・ツアー」(1996〜97年)のオープニング。宇宙船に乗ったマイケルが時空を旅する映像が流れた後、ステージに着陸した宇宙船から金色の宇宙服を着たマイケルが登場するというハイテクな演出だった。写真＝Getty Images

それぞれの マイケル・ジャクソン

類まれなる歌声を持つシンガーとして。
ステージで躍動するダンサーとして。世界を驚かせるクリエイターとして。
稀代のスーパースターの多面的な魅力を語りつくす。

MJ & TK、 幻のコラボレーション 小室哲哉

(ミュージシャン、音楽プロデューサー)

音楽プロデューサーとして多忙を極めていた1990年代後半、小室哲哉氏はマイケル・ジャクソンと邂逅(かいこう)を果たしている。ともに1958年生まれで、ポピュラーミュージックの新たな地平を切り開いた二人の音楽家の間に、どんな交流があったのか？

マイケルは「カッティング・エッジ」という言葉を繰り返し口にしていた

——小室さんはマイケル・ジャクソンと親交があり、楽曲制作を依頼されたこともあったそうですね。それはいつ頃の話だったんですか？

小室 最初に会ったのは1997年です。すべの始まりはバリでした。当時、マイケルは「ヒストリー・ワールド・ツアー」(1996〜97年にかけて、世界35か国・58都市で82公演)でヨーロッパを回っている最中でした。ところが、そのタイミングで英国王室のダイアナ妃が交通事故で亡くなってしまったんです。マイケルは彼

女と親交が深かったらしく、その死に大きなショックを受けてツアーを一時中断し、彼女が亡くなった地であるバリに滞在していたわけです。そのとき、僕もたまたまバリにいました。なぜいたのかははっきり覚えていないのですが、おそらく1998年のワールドカップ・フランス大会で演奏する機会をいただいていたので、その打ち合わせやリハーサルのためだったと思います。

——当時、小室さんはロサンゼルスに活動拠点を移していましたよね。

小室 ええ。あの頃の僕は海外進出を視野に入れている、バックストリート・ボーイズのアジア版の楽曲(「Missing You」)。97年のアルバム

『バックストリート・バック』(日本盤収録)や、ブラックミュージック(Sister Notか)への楽曲提供など、数は多くありませんが、少しずつ実績を積み重ねている最中でした。

その活動を支援してくれていたのが、ショービジネス専門の弁護士ジョン・ブランカ(映画『Michael/マイケル』にも登場)でした。彼はマイケルの顧問弁護士も担当していた方で、「マイケルが今、バリにいるよ」と僕に教えてくれたんです。それ以降は記憶が曖昧ですね。僕がブランカに「マイケルがバリにいるなら会えない？」と頼んだのかもしれないし、あるいはマイケルのほうが「アジアのトッププロデューサーがいるなら会いたい」と言ってくれたのかもしれない。ブランカとしても、僕とマイケルを会わせれば何かしらのケミストリーが生まれると考えていたでしょうし。ともあれ、僕はブランカの手引きで、マイケルが滞在するホテルの一室を訪ねることになりました。

この続きは本誌でぜひ！